

《拙發表文:『傳統にたいする心構』より。恒存理論の圖的言ひ換へ》

* 文化(D1)のある處(換言すれば自國の歴史Cとの「適應正常化=非沈湎」が圖れてゐる國)では、「E」を至大化させる「型・仕來り・様式・儀式」が形成されてゐて、その「型・仕來り」が歴史との關係(文化)を形ある「物」として生き方に反映(Eを至大化)させてくれるのである。文化(D1)のある國は「仕來りE」を持つが故に、「對象・言葉との距離測定不能(言葉に呪縛)」が原因の、適應異常や狂氣の回避が可能となるのである。その事柄を「右圖」で言へば、「D1の至大化=Eの至大化」と言ふ事になる。「型・仕來り・様式・儀式」は生活・言葉への囚はれから人を救出してくれるのである。更に換言すれば、平生足をさらはれてゐる様な現實的平面から意識を立ち上がらせててくれる。なぜにそれが可能となるかと言へば、「型・仕來り・様式・儀式」に内在する働き、恒存の文章に従へば、以下文のダイナミズムをそれは宿してゐるからなのであると理解する。「そもそも動作や作用、さらに人間の抽象的な營みを名詞化しようといふ働きそのものが、主體である自分を對象から分離し、距離をつくらうとする衝動なのです」(全三P204『日本および日本人』)。

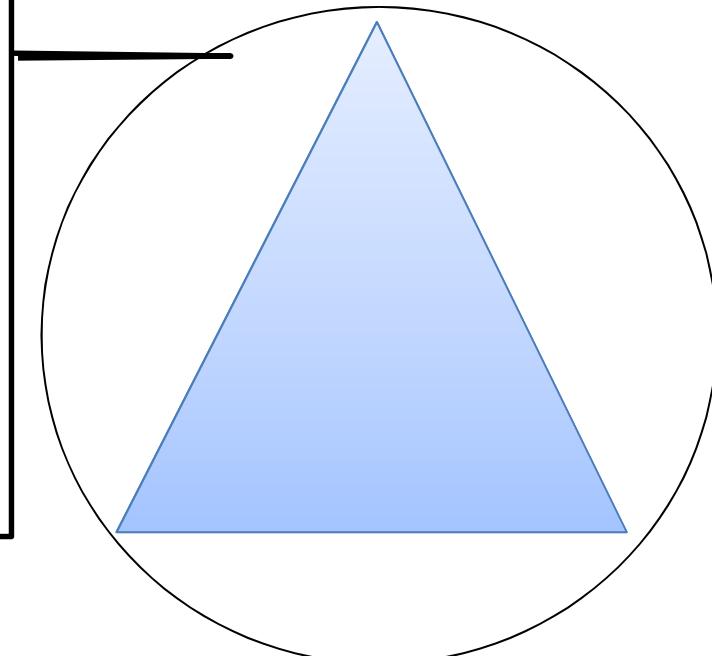
〔形骸化した和について〕

* 以下圖は人間(△圖)が和(言葉・○圖)に呑み込まれ「和との附合ひ」の距離感(E)を喪失してゐる状態。「言葉・物が單なる言葉・物にしか見えない」状態。即ち「形骸化した和」「既成概念化した和」。

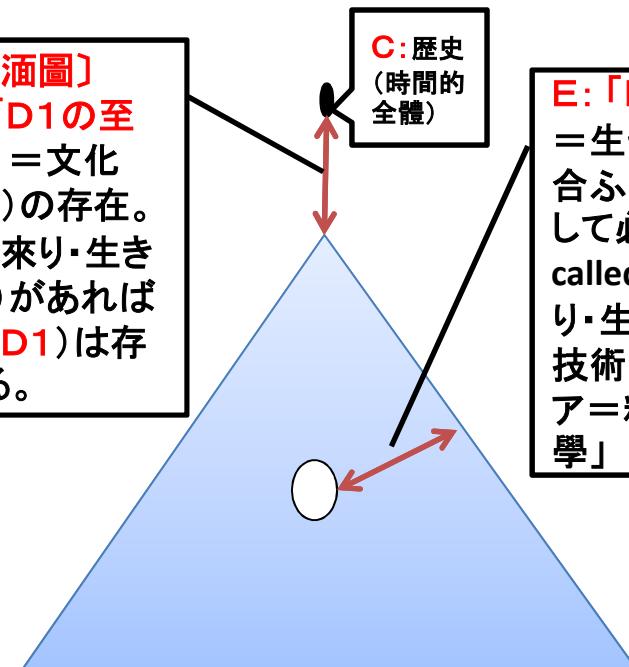
* 下圖は、「物(F・O圖)を生き物として附合ふ」即ち、「生き物として」と言ふ、「So called」化、「Eの至大化=自分と言葉(物)との距離の測定」が出來てゐる状態。

* 「自分と言葉(物)との距離の測定が出来る」とは「言葉(物)を自己所有化する」と言ふ事。即ち、意識度を高くし、言葉(物)の用法に細心の注意をし、「言葉(物)を自分から遠く離す事によって、逆にその言葉を精神化し、支配、操作する事が出来る様になる」(P391全七)。さうする事によつて「自分に近付け、言葉を物そのものから離して自分の所有にする事が可能になる」。

〔沈湎圖〕
D1の喪失
はEの喪失。
即ち文化の喪失
=型の喪失
=物・言葉との附合ひ方の喪失...
「野蠻」↔
「文化文明」



〔非沈湎圖〕
D1:「D1の至大化」=文化(關係)の存在。
型・仕來り・生き方(E)があれば文化(D1)は存在する。



E:「Eの至大化」=生き物として附合ふ。その手段として必要な「So called」「型・仕來り・生き方・様式・技術」「ソフトウェア=精神の政治學」